

古代語の時間副詞「時（とき）に」の考察 ——古代中国語「時」と比較して——

山崎 貞子

A Study of the Evolving Usage of Japanese Time-Adverb "*tokini*" In Comparison with Old Chinese Time-Adverbs

Sadako YAMAZAKI

Abstract

Time-adverbs have been considered to be a means of lexicology in the study of tense and aspect in Japanese language. However, in recently conducted research of modern Japanese adverbs, little or no attention has been paid to time-adverbs of more traditional or historical Japanese. Despite this lack of attention the field is considered important for construction of systematic Japanese time expressions.

The purpose of this study is to clarify the origin and meaning of Japanese time-adverbs. It considers how old Japanese time-adverbs have changed under the influence of old Chinese time-adverbs in relation to adoption of Kanji (Chinese letters) and Kun (Japanese letters). The meaning and usage of the specific time-adverb, *tokini*, were affected from the old Chinese in the Nara period. It was written in Kanji (Chinese letters) and has various kinds of Kun (Japanese letters) which illustrated to the point of time and frequency. In addition *tokini* was also used as a conjunction and demonstrative noun following the old Chinese usage. Later, in the Heian period, it was used in Kanbunkundokubun, but not in Wabun. During the Kamakura and Muromachi periods Wakankonkohbun became popular and *tokini* mainly came to indicate the point of time.

はじめに

現代語の時間副詞「時に」は、頻度を表す副詞の中で、「常に」や「しばしば」「時々」などに対して低頻度を表すものである。時間副詞は、日本語の時間表現における語彙論的方法として位置付けられてきた。これまで「時に」は現代語のアспект研究の中で取り上げられたり、漢文訓読文の「時」字についての考察がなされたりしてきたが、古代語「時に」についての詳しい研究はほとんどなされていない。上代資料では、すでに『万葉集』に「等伎」「等只」が認められ、『古事記』『日本書紀』には、「時」字が副詞として用いられている。中古の和文には副詞の例がなく、漢文訓読文のみに見られるが、「ときに」「よりより」「ここに」などの訓が与えられている。これらの訓と「時」字が持

つ意味との関係に着目し、日本語の中で「時に」がどのように理解されていったかを考察する。また中古の『今昔物語集』や中世の和漢混淆文では、時間副詞「時に」は、「頻度を表す」ものはほとんど見られず、「動作事態が起こる時点を表す」ものが中心となっているが、その意味変化について明らかにしていく。これらの解明にあたっては、古代中国語「時」との比較によって、古代日本語「ときに」を検証する方法をとる。すでに拙稿で、古代語の時間副詞「既に」について、古代中国語「既」との比較を行い、その意味が漢文訓読文や漢字の訓によって、日本語「すでに」にやきつけられていたことを論じた。¹本稿では、古代中国語の時間副詞「時」と漢文訓読資料及び上代から中世までの資料における時間副詞「時に」について、その意味用法を比較する。

1 古代中国語「時」の意味と用法

古代中国語の副詞については、太田（1964）が、春秋末より前漢にいたる言語をその規範とし、『論語』『孟子』を取り上げて論じ、意味の上から「程度」「時間」「範囲」「情態」「否定」「疑問」に分類している。『論語』『孟子』では、「時」は主に名詞として用いられるが、『古代漢語虚詞詞典』（1999）によると、古代中国語では、「時」はもともと時間詞として用いられたが、句首或いは述語の前に用いて、虚詞化して²、時間副詞になったものであるとする。中国語における時制は、形態変化によらず、時間詞あるいは時間副詞によって表され、重要な役割を担っている。「時」は、時間を意味する基本的な語であり、『字統』によると、「声符は寺。寺にある状態を持続する意がある。〔説文〕七上に「四時なり」とあり、後に時間の意に用いる」とされる。また中国語の副詞は、接続詞のようなはたらきをする。太田（1964）は、「既」「又」「以」等に副詞と連詞のはたらきを認めている。連詞とは、単語と単語、句と句、文と文を接続するものである。時間副詞「既に」については、拙稿（2003）で、古代中国語の副詞と連詞の用法が、古代日本語にも認められることを論じたので参考にされたい。「時」についても、「于」と結合した「于時」には、連詞の用法がある。本稿では、古代中国語と古代日本語との比較を行うことから、この連詞についても取り上げる。調査資料は『論語』『孟子』『中庸』『大学』『詩経』『書経』『史記』『春秋左氏伝』『韓非子』等を取り上げ、本文は（『新釈漢文大系』1962年明治書院）によった。

「時」は、『論語』に9例、『孟子』に34例あるが、ほとんどが名詞で、時間副詞はそれぞれ1例しかない。

(1) 子曰、学而時習之、不亦説乎。（『論語』1・1）

(2) 知虞公之將亡而先去之、不可謂不智也。時舉於秦、知穆公之可與有行也而相之、可謂不智乎。（『孟子』萬章章句上・9）

(1) の「時」については、朱子の新注に「既学而時時習之」とあり、「学んだことをいつも繰り返して習う。」であって、「常に」という意味を表すとする。井上（1956）では、漢文訓読文の副詞について、中国語の意味をもとに論じているが、「時」については、「之を常にするという意味。」（副詞「時

¹ 拙稿2003年「古代語の時間副詞「すでに」の考察—古代中国語「既」と比較して—」『国文』第99号

² 中国語では、品詞に関して、実詞と虚詞の二分類法が行われている。前者は、名詞・動詞・形容詞等、後者は、介詞、語氣詞、連詞等が挙げられる。副詞については、実詞と虚詞のいずれに属するかの議論が多いが、ここでは興水（1985）や楊伯峻（1991）に従って虚詞とする。

時」と同じ意味である。)と「ときどき、たまにするという意味。」の2つの意味があるとする。(p295) また鈴木(1975)は、「時」の用法について、以下のように述べ、「常に」の意味があることを示している。

古代漢語においては、「日」の一字だけで「日日」の意味を表すことができたように「時」も、一字だけで「時時」の意味に用いることができた。(p235)

(2)は、「百里奚」という人物について述べた箇所、「虞公がやがて滅びるだろうということを知って、諫めなかったのだから、彼を不知者と言えようか、言えない。その時にちょうど秦に登用され、穆公がともに事をなすに足ることを知ると、忽ちその宰相となったのは、不知者と言えようか、言えない。」という意味で、「時」は「ちょうどその時に」という動作事態の発生する時点を表す。

その他の「時」の例を挙げる。

(3) 成己、仁也。成物、知也。性之徳也、合外内之道也。故時措之宜也。(『中庸』25)

(4) 且緩急、人之所時有也。(『史記』巻124・游俠列伝第64)

(5) 是以神降之福、時無災害。(『春秋左氏伝』成公16年)

(6) 嗟爾朋友 予豈不知而作 如彼飛蟲 時亦弋獲 既之陰女 反予來赫

(『詩經』蕩之什・桑桑)

(7) 時飲醉臥、武負、負媼見其上常有怪。(『漢書』高帝紀上)

(8) 妻君時在旁、知狀。(『漢書』陳遵伝)

(9) 鄭人有一人、將宦。謂其家曰、必築壞牆、是不善人將窃。其巷人亦云、不時築、而人果窃之。

(『韓非子』説林下第23)

(3)は、「誠」について述べた箇所、「誠は、人間の内に備わる性の(仁・知)などの優れた徳であり、しかも外内の物を和合する道である。だから誠はどんな時に用いても常に物事の適正さを得る。」という意味であり、「時」は、「常に」という意味になる。(4)は、「火急の場合は、常に人にはあることである。」という意味であり、(5)は、「このようなことをすれば神も福をもたらし、常に災害は起こることがない。」という意味である。「時」は「いつも、常に」で高頻度を表す。(6)は、「あの空飛ぶ鳥のように、たまに射獲られることもあるのだ。」という意味で、低頻度を表す。(7)も、「たまに飲んで酔って横になる」という意味である。(8)は、「当時」という意味で過去の時点を表す。(9)は、「鄭の人に息子があり、これが役人になって、家を出発する際に、家の人に戒めて、必ず垣根の壊れを修繕しなさい。悪いやつが盗みに入ってくるよと言った。その町内に住む一人も同じ忠告をした。すぐその時に垣根を修繕しなかったので、盗みに入られた。」という意味で、「動作事態の起こった時点」を表す。

「時」には、名詞、副詞以外に「于時」として連詞の用法があることは前述した。さらに「時」字に、時間的意味の他に、「之」「是」のように指示する意味がある。³そこから、「時」が「この」「その」のような指示詞となったり、「これ」「ここ」等のように事物や場所を表したりする。また「于時」

³ 『字通』には、古文の字形は中山王鼎にもみえ、之と日とに従う。之にもものを指示特定する意があり〔書、舜典〕「百揆時(これ)敘す」のような用法があるとする。

として、「ここ」「そこ」等の場所を表したり、「この時に」「その時」等の時間を表したりする。これらは、中国語では、指示代詞としての用法となる。指示代詞とは、人・事物・場所などを指し示すもので、「是」「之」「其」などがある。

以下にその例を挙げる。

- (10) 畏天者保其国。詩云、畏天之威、于時保之。（『孟子』梁惠王章句下・3）
 (11) 帝曰、「我其試哉。」于時、觀厥刑于二女、釐降二女媿水、嬪于虞。（『書經』堯典6）
 (12) 湯誓曰、「『時日害喪、予及女偕亡。』民欲與之偕亡、雖有臺池鳥獸、豈能獨樂哉。」
 （『孟子』梁惠王章句上・2）
 (13) 敷天之下 袞時之対 時周之命 （『詩經』閔予小子之什・般）
 (14) 牧野洋洋 檀車煌煌 駟原彭彭 維師尚父 時維鷹揚 涼彼武王
 （『詩經』文王之什・大明）
 (15) 時邁其邦 昊天其子之 實右序有周 （『詩經』清廟之什・時邁）
 (16) 于時處處 于時廬旅 于時言言 于時語語（『詩經』生民之什・公劉）

(10) は、「天を畏れる者は、其の国を安泰に保つことができる。詩經に『天の条理を畏れ敬い、そして国を安泰に保つことができる。』とある。」という意味で、「于時」は、連詞で接続関係を表す。(11) は、「帝が舜を試してみようと言った。そこで、帝は先ず二人の娘の模範になることを見ようとして二人の娘を虞氏の婦とした。」という意味で、「于時」は、同じく連詞である。(12) は、「この日はいつかほろびるだろう。もし滅ぶなら、自分たちも皆滅んでもかまわないから、一日も早く滅んでほしい。」という人民の恨みで、「日」つまり太陽は王の事を言う。「時」は、「この」という指示代詞である。(13) は、周のすばらしさを述べた詩で、「天下いたるところ、人々を集めて天にお答えし上げる。これが周の天命ですと。」という意味で、「時」は、指示代詞として、事物を表す。(14) は、「牧野は洋々と広く、兵車は煌々と輝き、四頭の馬車馬はほうほうと強い。ここに太公望呂尚、行軍すること鷹のごとく、武王を助け、大殷を征伐した。」という意味で「時」は、指示代詞として、場所を表す。(15) は、「そもそも多くの諸国は、昊天から子のようにいつくしまれ、彼等は実によく周の国を助けた。」という意味で、「時」は、指示代詞として、事物を表す。(16) は、「于時」で「ここに」という意味を表し、場所を示す。「宋廟のある場所には、民が住み、集まる。その場所で、民は笑いながら語り合っている。」という意味である。

以上のことから、「時」の意味と用法は、次のように整理できる。分類においては、楊伯峻『古漢語虚詞』（1991）、中国社会科学語言研究所編『古代漢語虚詞詞典』（1999）を参考にした。

- I 副詞 (a) 動作事態が低程度で行われたり、起こったりする頻度を表す。
 (b) 動作事態が高程度で行われたり、起こったりする頻度を表す。
 (c) 動作事態が適時に行われたり、起こったりする時点を表す。
 (d) 動作事態が過去に行われたり、起こったりする時点を表す。
 II 代詞 (e) 指示代詞として、事物・場所を表す。
 (f) 「于時」で、動作事態が行われたり、起こったりする時間を表す。
 (g) 「于時」で、動作事態が行われたり、起こったりする場所を表す。

Ⅲ連詞 (h)「于時」で、連詞として接続関係を表す。

日本語の副詞に相当するものは、上記のⅠである。本稿ではⅠの副詞の用法を中心に考察するが、古代中国語の古代日本語への影響という観点から、Ⅱ代詞の「時」「于時」、Ⅲ連詞「于時」についても触れることにする。

2 漢文訓読文の「時」

漢文訓読という行為は、日本人が中国語の文章を日本人として個別に理解し、その理解した結果を漢文に忠実に、日本語に対応させる行為である。山田(1940)では、「漢語を日本人が知るに至るには、日本人と支那人とが直に相接するか、若しくは漢籍を日本人が読むかの二方法によるべきもの」と述べているが、どのように訓読したかによって、どのように理解したかを知ることができる。訓読語彙は「表現語彙」に対する「理解語彙」であって、漢籍や仏典の訓読を媒介にして、日本語の中にどのように取り入れられたかを見ることができる。

築島(1963)では、「時に」について、

- ・訓点では上から助詞を受けない「時ニ」「時ニハ」といふ語が副詞のように用いられることがある。和文には右のような用法はない。(p380)
- ・「時ニハ」といふ副詞的用法も存した。現代も用いる語であるが、その由来が古く漢文訓読に遡ることを知り得る。(p381)

と述べ、「トキニを副詞のように用いた例」として、次のものを挙げる。(例文は築島の引用)

- (17) 時^ニ有^テ一^ノ女^ニ (大般涅槃卷第三一平安後期点)
 (18) 時^ニは得^{コト}福^ヲ無^シ量^ニ (金光明最勝王経卷第三平安後期点)

また「于時」を「トキニ」と訓じた例として、次のものを挙げる。

- (19) 〔于〕時^ニは実歴^ニ創^ル基^ヲ伝^フ匠^ト (不空罽索神咒心経寛徳点16行)
 (20) 〔于〕時^ニ (来迎院藏安楽土義康2年〔1100〕点)

また「時」を「ヨリヨリ」と訓ずるものについても触れている。

- ・「時」は副詞としてはトキニと訓ずることが多いやうであるが、ヨリヨリと読むこともあるのである。(p502)

「時に」について『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点』を中心に訓点資料を調査した結果、次のような意味を表すものが認められた。例文については、ヲコト点は、平仮名で表記し、仮名点は片仮名で表記し、補読してある部分は()内に、平仮名で付した。仮名は、標準字体を用いた。句読点は訓点本のまま用い、不読字は〔 〕、欠損字は□を付した。

- (21) 法師徒侶(を)率テ後(に)進(む)、時^ニ亦^ハ屢^ニ逢^フ(へ)トモ然^レモ卒^ニ害^無(し)。
 (『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点』巻5-306)
 (22) 悲涙目(に)盈(つ)、時^ニ衆僧ノ夏(を)解(きて)、遠近輻湊スルモノ数千人ニ逢(ふ)、
 観(る)者、嗚噎(せ)不(といふこと)無(し)。

- (23) 時ニ縛喝ノ西南ニ銳未陀胡寔健国有（り）。
（『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点』 卷3-230）
（『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点』 卷2-168）
- (24) 既（に）出家することを得て兄與同止す。時に寺景法師といふもの有（り）て涅槃經を講す。
（『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点』 卷1-80）
- (25) 美問芳声竝從（り）発す〔矣〕。時に年十三（なり）〔也〕。
（『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点』 卷1-84）

(21) は、法師が山賊に略奪されることを畏れ、弟子を先に進ませて、山賊達に持ち物は經典や仏像だけだと言わせて、「法師は人々と後から進んだので、たまに山賊に会ったが、ついに害を受けなかった。」という意味であり、「時ニ」は、低頻度を表す。(22) は、「法師が悲涙を目に溢れさせて泣いた。ちょうどその日は夏座の解かれる日で、遠近の衆僧が数千人もここへ集まってきていたが、法師を見てもらい泣きしないものはいなかった。」という意味で、「時ニ」は、動作行為の発生がタイムリーであることを表す。(23) は、前文に玄奘が、バクトラで歓迎され、崇拜されたことの記述がある。「当時、バクトラの西南にユマダ・ゲーズガン国があった。」という意味で、「時ニ」は、過去の時点を表す。(24) は、「こうして出家してからは、兄と同じ所にいた。当時、浄土寺には、景法師という者がいて涅槃經を講じていた。」という意味で、「時ニ」は、同じく過去の時点を表す。(25) は、前文に師の講義を聴けば一度で理解し、再講義させても読みも解釈も師の教えを尽くしていたことの記述がある。「彼のすばらしい名声はここから始まった。当時彼は13歳であった。」で、(23) (24) と同じく過去の時点を表す。

この他に「トキニ」と「トキドキ」の訓が付されているものが見られる。

- (26) 時_{トキドキ}往（き）テ剃（る）コト（を）為。<ニ（虫損）>
（『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点』 卷5-439）
- (27) 時_{トキドキ}ニ開遮ヲ以テ之（を）祈（る）。
（『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点』 卷8-53）

また「時」を「ヨリヨリ」と訓ずるものについては、『大唐西域記』に以下のように、「卒堵波の光明が、斎日の時に光を照らす」という例がある。

- (28) 城（の）北十二三里（にして）卒堵波有（り）。无憂王（の）建（てしなり）。或（るときに）は斎日に至（て）時光明を放ツ。神花天楽頗（る）見聞有（り）。
（『大唐西域記』 卷三559-11）
- (29) 卒堵波の中に多（く）の舍利有（り）。或は斎有（る）日、時光明を放（つ）。
（『大唐西域記』 卷三585-1）

頻度の中程度から高程度のもは「ときどき」「よりより」の訓が与えられている。「ときに」と「ときどき」の2つの訓がある場合には「ときに」が低頻度ではないことを表しているとも考えられる。

以上の事から、「時」には、古代中国語の時間副詞「時」に見られた意味の内、次のものが認められた。

- I (a) 動作事態が低程度で行われたり、起こったりする頻度を表す。
 (b) 動作事態が中程度で行われたり、起こったりする頻度を表す。
 (c) 動作事態が適時に行われたり、起こったりする時点を表す。
 (d) 動作事態が過去に行われたり、起こったりする時点を表す。

次に、代詞「時」について、「ココニ」の訓が付されている指示代詞の例を挙げる。

- (30) 徳光院既(に)心遂(は)不^ス。便チ悲恨を起(し)則(ち)山林に趣(き)通定を修發す。
 我慢除(ら)ず。時ニ果を證(せ)不。

(『大唐西域記』卷四597-7)

次に「于時」について、「動作行為が発生したり、出現したりする時間を表す」ものと「動作行為が発生したり、出現したりする場所を表す」ものについて例を挙げる。

- (31) 昔賢(の)逮(は)不(る)所ニ通シ、先典(の)聞(か)未(る)所ニ悟(る)、遂
 (に)金牒を得。東ニ流(レ)テ断(え)ナムト^ス將^ツル教ヲ^ツ続キ、寶偈西ニ徒(り)テ已ニ
 欠ケタル文ヲ補スルコト得タリ、于時、迺^{カヘリ}靈基ヲ^{カヘリ}瞻ミ、心ヲ此ノ地ニ栖マシム。

(『興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点』卷8-394)

- (32) 何を須^モテカ漫^{ミヅリ}に相弄^{ナクサ}マむ。幾許^{ソコハク}精神^{セイシン}のタマシヒを費スヘキ。于時、夜^{フカ}久^{ヲク}更深^{フカク}ケテ沈吟^{フカク}
 とサマヨフテ睡ラレズ。(『遊仙窟』3ウ-7)

(31) は、時間を示し、「この時に」の意味となる例を挙げる。(32) は、場所を示し、「ここに」の意味となる例を挙げる。

ここで、「時」の和訓を見ると、観智院本『類聚名義抄』では

時 トキ トキトキ コノ ヨリヨリ コヽニ トキナフ イマ ミル ツブサニ
 ウウ アキラカ タスク シハラク タチマチニ モト カサヌ (仏中86)

とある。漢字に与えられた訓には、上記の時間副詞や指示代詞の意味が反映されていることが分かる。以上のことから、漢文訓読文の「時」「于時」の意味・用法は、次のように分類される。

- II (e) 指示代詞として、事物・場所を表す。
 (f) 「于時」で、動作事態が行われたり、起こったりする時間を表す。
 (g) 「于時」で、動作事態が行われたり、起こったりする場所を表す。
 これらは、前述した古代中国語のⅡ代詞の(e)(f)(g)と同じである。

日本語の副詞に相当する上記の (a) (b) (c) に加えて、漢文訓読文には古代中国語の代詞「時」「于時」の意味・用法が認められる。I (d) については、漢文訓読文では、低頻度を表すものの他に「ときどき」「よりより」などの中頻度を表すものが見られた。

3 上代資料の「時（とき）に」

古代日本語の「時（とき）に」について、上代資料の『万葉集』『古事記』『日本書紀』を対象に、その意味・用法を考察する。『万葉集』には名詞「等伎」「等吉」等が見られるが、副詞としては「時」が詞書きや左注に用いられている。さらに「于時」も認められる。小島（1962）では、上代日本文学と中国文学を比較し、その語彙の中で「既」「忽」「時」などの時間副詞も取り上げている。漢字文献としての『古事記』『日本書紀』では、副詞「時」また「于時」見られるが、これらについて調査した結果、古代中国語、漢文訓読文で調査した意味が認められた。資料は、主に『日本古典文学大系』等を使用し、『古事記』は日本思想大系『古事記』（1982年岩波書店）によった。

『万葉集』における「とき」は「等伎」「等吉」「登伎」「登吉」「登岐」「登枳」と表記され、いずれも名詞あるいは形式名詞である。これらの「とき」には、副詞としての用法は見られない。

(33) 同輩兒らと手携りて遊びけむときの盛りを留みかね過し遣りつれ
(余知古良等手多豆佐波利提阿蘇比家武等伎能佐迦利乎等尾迦祢周具斯野利都礼)
(『万葉集』巻5-804)

(34) たらちねの母に申してときも過ぎ月も経ぬれば今日か来む明日かも来むと
(多良知祢能波波麻乎之弓等伎毛須疑都奇母倍奴礼婆今日可許牟明日可蒙許武登)
(『万葉集』巻15-3688)

(35) 信濃なる須賀の荒野にほととぎす鳴く聲聞けばときすぎにけり
(信濃奈流須我能安良能尔保登等藝須奈久許惠伎氣婆登伎須疑尔家里)
(『万葉集』巻14-3352)

一方「時」字が、副詞として用いられているものは、詞書、左注にのみ見られる。

(36) 一書に、是の時に宮の前に二つの樹木あり。この二つの樹に斑鳩、比米二つの鳥さには集まれり。時に勅して多く稻穂を掛けてこれを養ひたまふ。
(一書、是時宮前在二樹木。此之二樹斑鳩比米二鳥大集。時勅多挂稻穂而養之。)
(『万葉集』巻1-6)

(37) 大伴田主、字を仲郎といふ。容姿佳艶にして風流秀絶なり。見る人聞く者歎息せざることなし。時に石川女郎といふもの有り。
(大伴田主、字曰仲郎。容姿佳艶、風流秀絶。見人聞者靡不歎息也。時有石川女郎。)
(『万葉集』巻2-126)

(36) は、離宮の前にある2本の木に斑鳩と比米鳥がたくさん集まってきた。「その時すぐに天皇

は勅命を以て、多くの稲穂を餌として与えた。」という意味であり、「時に」は、動作行為の発生が、時を得ていることを表す。(37)は、容姿端麗な大伴田主がいた。「その頃に石川女郎という女がいた。」という意味で、動作事態が過去の時点に起こったことを表す。(36)(37)は、古代中国語に見られた意味である。

この他に、『万葉集』には、「于時」が詞書に見られる。

- (38) 紀に日はく、天皇七年丁卯、夏五月五日、蒲生野に縦獵したまふ。時に大皇弟・諸王・内臣と群臣、悉皆に従そといへり。

(紀曰、天皇七年丁卯、夏五月五日、縦獲於蒲生野。于時大皇弟諸王内臣及群臣悉皆従焉)
(『万葉集』巻1-21)

- (39) 右、田村大嬢と坂上大嬢と、並びに右大辨大伴宿奈磨卿の女そ。卿、田村の里に居む。號を田村大嬢と曰ふ。但し、妹坂上大嬢は、母、坂上の里に居む、仍りて坂上大嬢と曰ふ。時に姉妹諮問ひに、歌を以ちて贈答す。

(右、田村大嬢坂上大嬢、並是石大辨大伴宿奈磨卿之女也。卿、居田村里。号曰田村大嬢。但、妹坂上大嬢者、母、居坂上里、仍曰坂上大嬢。于時姉妹諮問、以詞贈答)
(『万葉集』巻4-759)

- (40) しかして数句を経て、幸に平復すること得たり。時に稻公等、病既に癒えたるを以ちて、府を發して京に上る。

(而逕數句、幸得平復。于時稻公等、以病既療、發府上京。)
(『万葉集』巻4-567)

(38)は、天皇が蒲生野に狩りをなさった。「その時に大海人皇子、諸王、群臣達が随従した。」という意味である。(39)は、別々に暮らす姉妹の田村大嬢と坂上大嬢が「その時にお互い歌を贈答し合った。」という意味である。(38)(39)は、「于時」で、「動作事態が発生したり、出現したりする時間」を表している。これは、古代中国語に見られた「于時」と同様である。これらに対し(40)は、卿の足は数十日を経て幸いにも平癒した。「そこで、稻公達は帰郷することになった。」という意味で、「于時」が接続関係を表している。これは、古代中国語の連詞の用法である。

次に『古事記』について見ると、副詞「時」は、次の2例のみである。

- (41) 故惟れ、帝紀を撰録し、舊辭を討覈して、偽りを削り實を定めて、後葉に流へむと欲ふ。」とのりたまひき。時に舍人有りき。姓は稗田、名は阿禮、年は是れ廿八。

(故惟、撰・録帝紀、討・覈舊辭、削偽定實、欲流後葉。時_レ有_レ舍人。姓稗田、名阿禮、年は廿八。)
(『古事記』序15-6)

- (42) 故、是ノ樹を切りて船に作れるに、甚捷く行く船なりき。時に其の船を号けて枯野と謂ふ。(故、切是樹以作船、甚捷行之船也。時號其船謂枯野。)

(『古事記』仁徳244-9)

(41) は、帝紀の作成についての詔勅があった。「その時に一人の舎人がいた。」という意味で、動作事態が過去の時点に起こったことを表す。(42) は、「この木を切って船に作ったところ、大変早く進む船となった。そこでその船を枯野と名付けた。」という意味である。ここでの「時」は、「そこで」という意味で、接続関係である。「応神紀三一年」の条に、「科_レ伊豆国、令_レ造_レ船。長十丈。船既成、試浮_二于海_一。便軽泛疾行如_レ馳。故名_二其船曰_一枯野。」とあり、接続関係となっている。(41) (42) は、それぞれ古代中国語の時間副詞と連詞の用法である。

次に『日本書紀』における「時」「于時」について、その意味と用法を考察する。

- (43) 「皇孫、八重の隈を隔つと雖も、冀はくは時に復相憶して、な棄直てたまひそ」
(皇孫雖隔 八重之隈、冀時復相憶、而勿棄置也。) (『日本書紀』神代下174-4)
- (44) 是の時に、素戔鳴尊、天より出雲國の簸の川上に降到ります。時に川上に啼哭く聲有るを聞く。
(是時、素戔鳴尊、自天而降到於出雲國簸之川上。時間川上有啼哭之聲。) (『日本書紀』神代上121-1)
- (45) 乃ち御手を以て、細に磐戸を開けて窺す。時に手力雄神、則ち天照大神の手を奉承りて、引き奉出る。
(乃以御手、細開磐戸窺之。時手力雄神、則奉承天照大神之手、引而奉出。) (『日本書紀』神代上112-17)
- (46) 是に、天下恆闇にして、復晝夜の殊も無し。故、八十萬の神を天高市に會へて問はしむ。時に高皇産靈の息思兼神といふ者有り。思慮の智有り。
(於是、天下恆闇、無復晝夜之殊。故會八十萬神於天高市而問之。時有高皇産靈之息思兼神者。有思慮之智。) (『日本書紀』神代上114-6)
- (47) 故、皇孫就きて留住ります。時に彼の國に美人有り。名を鹿葦津姫と曰ふ。
(故皇孫就而留住。時彼國有美人。名曰鹿葦津姫。) (『日本書紀』神代下141-3)

(43) は、「遙か遠く離れても、ときどき私を思い出して、お捨てにならないでください。」という意味で、「時」は中程度の頻度を表す。(44) は、「素戔鳴尊が高天原から地上の出雲の国の簸の川上に降り立った。ちょうどその時に川上で泣き声がするのを聞いた。」という意味で、「時」は、動作行為の発生がタイムリーであることを表す。(45) は、天の岩戸に入った天照大神が、外の様子を見ようと、自分の手で岩戸を少し開けて、外を窺った。ちょうどその時手力雄神は、天照大神の手を取って引き出し申し上げた。」という意味で、この「時」も(44)と同じである。(46) は、「天下が全くの暗闇になったので、多くの神々が集まって相談した。当時高皇産靈の息子で思兼神という者がいた。思慮深い知恵があった。」という意味で、「時」は、過去の時点を示す。(47) も、「吾田の笠狭崎に皇孫が留まった。当時その国には美人がいた。名を鹿葦津姫と言った。」という意味で、過去の時点を表す。

また「于時」には次のような例が見られる。

(48) 一書に曰はく、古に國に稚しく地稚しき時に、譬へば浮膏の猶くして漂蕩へり。時に、國の中に物生れり。状葦牙の抽け出でたるが如し。

(一書曰、古國稚地稚之時、譬猶浮膏而漂蕩。于時、國中生物。状如葦牙之抽出也。)

(『日本書記』神代上77-4)

(49) 既にして諸の神、素戔鳴尊を嘖めて曰はく、「汝が所行甚だ無頼し。故、天上に住むべからず。亦葦原中國にも居るべからず。急に底根の國に適ね」といひて、乃ち共に逐降ひ去りき。時に、霖ふる。素戔鳴尊、青草を結束ひて、笠蓑として、宿を衆神に乞ふ。

(既而諸神、嘖素戔鳴尊曰、汝所行甚無頼。故不可住於天上。亦不可居於葦原中國。宜急適於底根之國、乃共逐降去。于時、霖也。素戔鳴尊、結束青草、以爲笠蓑、而乞宿於。)

(『日本書記』神代上118-8)

(50) 此に由りて、發慍りまして、乃ち天石窟に入りまして、磐戸を閉して幽り居しぬ。故、六合の内常闇にして、晝夜の相代も知らず。時に、八十萬神、天安河邊に會ひて、其の禱るべき方を計ふ。

(由此、發慍、乃入于天石窟、閉磐戸而幽居焉。故六合之内常闇、而不知晝夜之相代。于時、八十萬神、會於天安河邊、計其可禱之方。)

(『日本書記』神代上112-6)

(51) 故、二の神天に登るといふ。倭文神、此をば斯圖梨俄未と云ふ。果に復命す。時に、高皇産靈尊、眞床追衾を以て、皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊に覆ひて降りまさしむ。

(故加遣倭文神建葉槌命者則服。故二神登天也。倭文神、此云斯圖梨俄未。果以復命。于時、高皇産靈尊、以眞床追衾、覆於皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊使降之。)

(『日本書記』神代下140-12)

(48) は、「于時」は、国がまだできあがってなく、浮かぶあぶらのようであった時を表す。(49) の「于時」も、すさのおの神が天上も地上も追われて根の国に去ることになった時を指し示す。これに対し(50)(51)の「于時」は、接続関係を表す。

小島(1962)では、『日本書紀』において、「則」「乃」「而」「時」「因」などの接続の助字の使用によって、文章が組み立てられている点を指摘しているが、(50)(51)の用法も接続関係を表している。ただし小島では、「時」と「于時」の違いについては触れていない。

また小島(1962)では、『懷風藻』序に、「時」に「よりより」の訓が与えられていることを指摘している。

旋招^{オホ}文学之士。時^{ヨリヨリ}開置^{ヨリヨリ}體之遊。(天和本の訓。例は小島(1962)の引用)

これは、表現語彙としての「時」字に「中程度の頻度を表す」意味があることになる。『古事記』には、「時時」の例が1例有り、「時時也往往也(『古事記』252-15)」に「ときどき」で中程度の頻度の表すものがある。

以上のことから、上代資料の「時」に意味と用法は以下のように整理される。

- I (b) 動作事態が中程度で行われたり、起こったりする頻度を表す。
(c) 動作事態が適時に行われたり、起こったりする時点を表す。
(d) 動作事態が過去に行われたり、起こったりする時点を表す。
- II (e) 指示代詞として、事物・場所を表す。
(f) 「于時」で、動作事態が行われたり、起こったりする時間を表す。
- III (h) 「于時」で、接続関係を表す。

Iは、時間副詞の用法である。IIは、古代中国語の代詞の用法であり、IIIは、古代中国語の連詞の用法と同じである。上代資料の「時」の意味は、以上のように多様な意味があり、古代中国語「時」の意味を理解した上で、表現語彙として使用していると言える。このことは、次のような疑問も解決しうる。

小島（1962）では、『懐風藻』の「絲竹時盤桓。文酒乍留連。」について、

天和四年刊本に、「トキニータチマチ」と訓んで以来、諸注これにしたがうが、トキニとタチマチでは訓が少しちぐはぐである。「時—乍」の呼応の例は詩賦に多い。

として、「時—乍」「時—時」「乍—乍」の例を挙げる。

この「時」には上記I (c)の意味で、「(乍)たちまち」に依っている。こうした「時」の意味用法は、古代中国語との比較により明らかにしていくことができ、時間副詞の解明は、上代文学の解釈にも応用可能であると思われる。

4 中古資料の「時（とき）に」

築島（1963）が指摘したように、時間副詞「時（とき）に」は、漢文訓読資料には見られるが、和文資料には使われていない。中古資料の中では、『今昔物語集』に、16例の「時に」があるが、15例が天竺震旦部で、1例が本朝仏法部である。次に「時に」の例を挙げる。

- (52) 今昔、天竺ニ迦葉尊者、里ニ出デ、乞食シ給ヒケリ。時に尊者、思給フ、「我レ、福貴ノ家ニハ暫ク不行ジ、貧窮ノ所ニ行テ其ノ施ヲ受ムト
(『今昔物語集』 卷二第六 132-3)
- (53) 其ノ時ニ流離王、城ノ外ニ在テ云ク、「汝等、速ニ城ノ門ヲ開ケ。若不開ズ数ヲ盡シテ可殺シ」ト。時に、迦毘羅城ノ中ニ一人ノ釋種ノ童子有リ。年十五也。名ヲバ奢摩ト云フ。
(『今昔物語集』 卷二第二八173-7)
- (54) 明カニ寶ヲ見テ盗ムガ為ニ箭ノ筈ヲ以テ燈明ヲ挑グ。時に佛ノ御形金色ニシテ塔ノ内ニ耀キ満タリ。
(『今昔物語集』 卷二 第一七154-12)
- (55) 摩耶、佛ニ白シテ言サク、「我レ既ニ生死ヲ離レテ解脱ヲ得タリト。」時に其ノ座ノ大衆、此ノ事ヲ聞テ皆異口同音ニシテ、佛ニ白テ言サク、「願ハ、佛、一切衆生ヲ皆如此ク解脱ヲ得シメ給ヘ」ト。佛又、一切衆生ノ為ニ法ヲ説給フ。
(『今昔物語集』 卷二 第二126-12)

(56) 王ノ云ク、「汝ト通ゼムト欲フ」ト。女ノ云ク、「我レ今、何ノ故ニカ釋種トシテ、奴婢ノ生ゼル王ト通ゼム」ト。時ニ、王大ニ臆恚ヲ起シテ群臣ニ仰セテ、此ノ女ノ手足ヲ切テ深キ坑ノ中ニ着ツ。 (『今昔物語集』巻二 第二八174-6)

(57) 昔シ此ノ國ニ大王有キ。子无クシテ天ニ乞ヒ、龍神ニ祈テ子ヲ願ヒキ。時ニ其后壞任シテ一人ノ男子ヲ生タリキ。 (『今昔物語集』巻一 第四129-7)

(52) は、迦葉尊者が、乞食をしていたが、「ある時に思ったことには」という意味で、「時に」は、過去の時点を表す。(53) も、流離王が城を攻めてきたが、「当時城には一人の釋種の童子がいた。」という意味で、同じく過去の時点を表す。(54) は、盜賊が宝を見つけて燈明をつけたところ、「ちょうどその時に仏の像が金色に輝いて」という意味で、「時に」は、「動作行為の発生がタイムリーであること」を表している。(55) も、摩耶が、仏に解脱を得たことを告げたところ、「ちょうどその時にその座にいた大衆がそれを聞いて」という意味で、(54) と同じ意味を表す。また (56) は、王が女の言った言葉を聞いて、「すぐに王は激しい怒りを起こして家臣に告げて」という意味で、「時に」は、「ちょうどすぐに」行動を起こす場合に用いられている。(57) も、大王が子を授かるよう龍神に祈ったところ、「ちょうどすぐにその后が懐妊して一人の男子を生んだ。」という意味で、(56) と同じ意味を表す。これらは、時間副詞として「動作事態がちょうど行われたり、起こったりする時点」を表し、古代中国語、漢文訓読文及び上代の資料に見られたものである。

これらとは異なり、次に挙げるものは「そこで」「そうして」の意味で接続関係を表している。

(58) 外道、舍利弗ノ相ヲ嫌マムト思テ云ク、「君ガ子ハ女也」ト云テ返。其後、舍利弗來給ヘリ。長者、外道ノ「女也」ト云ツル事ヲ語ル。舍利弗、尚、「男也」ト宣フ、外道ハ尚、「女也」ト云テ、相互ニ挑ム。時ニ、長者、佛ノ御許ニ詣テ此實否ヲ問奉ル。 (『今昔物語集』巻一第一五 84-1)

(59) 流離王ノ軍、釋種ノ箭ニ不當ズト云フ事无シ、皆倒臥シヌ。然レドモ死ヌル事ハ无シ。此ニ依テ流離王ノ軍、憚ヲ成シテ責メ寄ル事无シ。時ニ好苦梵志、流離王ニ申サク、「釋種ハ皆兵ノ道ニ極タリト云ヘドモ、戒ヲ持テル者ナレバ虫ヲソラ不害ズ、況ヤ、人ヲ殺ス事ヲヤ。然レバ實ニハ不射ザル也。仍テ不憚ズ可責シ」ト。 (『今昔物語集』巻二第二八 173-4)

(58) は、長者の所に生まれる子が女か男かということで、外道と舍利弗が争った。「そこで長者は仏の御許に詣でそのことを訪ねた。」という意味で、「時に」は、接続関係を表している。(59) も、流離王の軍が城に攻め寄せずにいた。「そこで好苦梵志が、流離王に申上げた。」という意味で、(58) と同じく接続関係を表す。

『今昔物語集』には、「時に」は16例しかないが、「其の時に」「其の時」は非常に多い。谷光(1965)では、「其ノ時」「其ノ時ニ」「時ニ」の用法を取り上げている。特に「其ノ時」「其ノ時ニ」は、仏典類の「爾時」の訓読によって生まれた語であり、本邦の仏典類では、「其時」の形で用いたことを示している。藤井(2004)は、『今昔物語集』の接続語として「而ル間」「其ノ時ニ」を取り上

げ、これらが「新たな段落・場面を起こす機能を持つ」ことを指摘している。藤井の調査では、「而ル間」558例、「其ノ時ニ」474例、「其ノ後」500例、「サテ」147例等について検証し、段落冒頭部に用いる接続語として採集したものの中に、「ときに」を入れている。

『今昔物語集』の全体的な概観として、

天竺震旦部では、「そのときに」、本朝仏法部では、「しかるあいだ」、本朝世俗部では、「さて」が各部において最も特徴的なものであるといえる。これらは各部において段落冒頭の接続語の機軸になっている。

と述べる。「時に」のほとんどが天竺震旦部に使用されていることは、「其ノ時ニ」との関係も考えられる。「其ノ時ニ」には、接続的な用法と副詞的な用法が認められ、藤井は、本朝部では、「其ノ時ニ」が、段落冒頭部以外の展開部で用いる事が多くなり、「すると、そのときであった」のような意味で、長大な話の中で特に焦点を当てたい場面を強調する副詞的な用法に転じていくことを指摘している。ここでは、「時に」を中心に述べるが、「其の時に」との関係から見ても、接続的な働きを持つ用法が本集に認められることは、日本語の中で、「于時」ではなく「時に」であっても、接続関係を表すようになったと言える。

5 中世資料の「時（とき）に」

語彙史の上から、『今昔物語集』が中世の和漢混淆文に影響を及ぼしていることは、先行研究によって知れるが、ここでは、上代資料の『古事記』『日本書紀』『万葉集』から、中古の『今昔物語集』までの「時（とき）に」に見られた意味用法は、中世の和漢混淆文ではどのようなかについて調査・分析を行った。資料は、主に『日本古典文学大系』等を使用し、『太平記』は仮名書き本である『土井本太平記本文及び語彙索引』（西端幸雄・志浦由紀恵共編勉誠社1997年）を参考にした。

中世の資料の中で、和漢混淆文には、以下のように「時に」が認められる。

- (60) 屋形の上に廿斗にて、ひはづなる僧の経袋くびにかけて、よるひる經よみつるをとりて、海にうち入つ。時に手まどひして、経袋をとりて、水のうへにうかびながら、手をさゝげて、この經をさゝげて、浮きいでいでするときに、
(『宇治拾遺物語』巻10・10 302-12)
- (61) 只潤谷に鳥の一聲ばかりにて、苔のぬれ衣ほしあへず。無實の罪によ（ッ）て遠流の重科をかうぶる事を、天道あはれみ給て、九曜のかたちを現じつゝ、一行阿闍梨をまもり給。時に一行右の指をくひき（ッ）て、左の袂に九曜のかたちを寫れけり。和漢兩朝に眞言の本尊たる九曜の曼陀羅是也。
(『平家物語』上149-10)
- (62) 御夢さめさせ給てのち、御心地例ならずおはしまして、時に朗詠讀經などせさせ給けり。
(『古今著聞集』454-14)
- (63) ややあって双鬢の童女出でて、方士を内へいざなひ入る。方士手を揖して、金闕の玉の庇に跪く。時に玉妃夢覚めて、枕を押し退けて起き給ふ。
(『太平記』3-395-4)

- (64) 后たちは、目に見えぬ物のしのびて寄くるを帝に申す。時に御かど、賢くをはしける御かどにして
 (『古本説話集』221-5)
- (65) うれしく覺て、其後日々にこれをくみて、飽まで父をやしなふ。時に御門、此事をきこしめして、靈龜三年九月日、其所へ行幸ありて、叡覽ありけり。
 (『古今著聞集』247-12)
- (66) 宋朝の幼帝と太元の老皇帝と揚子江を隔て陣を張りて相對する事日久し。時に揚子江、俄に水干て陸地となる。
 (『太平記』3-421-15)
- (67) この劍代々の天子の御宝と成つて、世十嗣を経たり。時に第十代の帝、崇神天皇の御宇に、これを伊勢神宮に奉り給ふ。
 (『太平記』2-459-5)
- (68) 其比、妙音院殿の太政のおほいどの、内大臣の左大將にてましましけるが、大將を辞し申させ給ふ事ありけり。時に徳大寺の大納言實定卿、其仁にあたり給ふ由きこゆ。
 (『平家物語』上121-5)
- (69) むかし、成村といふ相撲ありけり。時に、國々の相撲ども、上あつまりて、相撲節待ける程、朱雀門に集まりてすゞみけるが、
 (『宇治拾遺物語』卷2・13 113-16)

(60) は、海に落ちた法師が、「ちょうどその時、うろたえまごついて経袋をとって」という意味であるから、事態が起こった時点を表す。(61) は、無実の罪で遠流となった一行が、九曜を見た「ちょうどその時、右の指を食いきって、左の袂に九曜の形を写し取った。」という意味であるから、(60) と同じく「事態が起こったちょうどその時」という時点を表す。また (62) は、夢から覚めて具合が悪くなった「その時すぐに」経を読んだりしたという意味である。(63) も、夢から覚めた「ちょうどその時」という時点を表す。これらに対して、(64) から (67) は、過去の時点を表す。(68) は、内大臣の左大將を辞した時を指し示す指示代名詞として用いられている。(69) も、同じく相撲があった時を指し示す指示代名詞である。

また『太平記』には次のような「于時」の例が見られる。(例文は『古典文学大系』による。)

- (70) 而ルニ傳教大師御入滅ノ後、智證大師ノ御弟子ト、慈覺大師ノ御弟子ト、聊法論ノ事有テ、忽ニ確執ニ及ケル間、智證大師ノ門徒修禪三百房引テ、三井寺ニ移ル。于時教待和尚百六十年行テ祈出シ給シ生身ノ彌勒菩薩ヲ智證大師ニ付屬シ給ヘリ。
 (『太平記』2-88-17)
- (71) 吾朝ニハ天武天皇與大友王子天下ヲ爭ハセ給ケル時、備中國ニ萬郷ト云所ニテ、兩方ノ兵戰ヲ決セントス。于時天武天皇ノ御勢ハ僅ニ三百餘騎、大友王子ノ御勢ハ、一萬餘騎也。

（『太平記』2-132-3）

(72) 大師定ヨリ出テ、此由ヲ奏聞有ケレバ、俄ニ大内ノ前ニ池ヲ掘セ、清涼ノ水ヲ湛テ龍王ヲゾ勸請シ給ケル。于時彼善女龍王金糸ノ八寸ノ龍ニ現ジテ、長九尺許ノ蛇ノ頂ニ乗テ此池ニ來給フ。
（『太平記』1-422-13）

(73) 諸ノ比丘怪テ、梨軍支ガ前生ノ所業ヲ佛ニ問奉ル。于時世尊諸ノ比丘ニ告曰、
（『太平記』3-334-17）

(70) の「于時」は、三井寺に移った時を表す。(71) の「于時」も、「両軍が決戦をしようとした」時を指し示す。これらは、古代中国語の代詞の用法である。これに対し (72) の「于時」は、「池を掘らせ、水を湛えて龍王をお呼びになった。すると善女龍王が、金色の八寸の龍に現じて池に起こしになった。」という意味で、接続関係を表す。(73) の「于時」も、「比丘たちが怪しんで、梨軍支の前世の所業を佛にお聞きした。そこで、お答えになったことには」という意味で、接続関係を表す。これらは、古代中国語の連詞の用法である。(70) から (73) の「于時」は、仮名書き本である『土井本太平記』⁴では、「ときに」とされている。

以上のことから、中世の和漢混淆文では、「時（とき）に」は、時間副詞として「動作事態が適時に行われたり、起こったりする時点を表す」ものと、「動作事態が過去に行われたり、起こったりする時点を表す」ものが見られる。頻度を表すものは、今回の調査では1例もなく、主に動作事態が発生した時点や過去の時点を表すものが中心であった。また漢文訓読資料や上代資料などに見られた「于時」で、「動作事態が行われたり、起こったりする時間を表す」ものや「接続関係を表す」ものが認められ、「ときに」と表記される場合もあった。

6 まとめ

上代資料における古代日本語の「とき」は、名詞の用法のみであった。『万葉集』『古事記』『日本書記』では、時間副詞として「時」字が用いられている。古代中国語の「時」の意味と用法は、以下に示すⅠ、Ⅱ、Ⅲである。Ⅰは時間副詞であるが、Ⅱは代詞、Ⅲは連詞である。本稿では、古代中国語との比較を行うという観点から、Ⅱ、Ⅲについても調査した。その結果、上代資料では、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの意味と用法が見られた。但し、時間副詞の意味の中で、高頻度のものではなく、中頻度のもののみが認められた。漢文訓読文では、Ⅰ、Ⅱが認められ、「トキニ」「トキドキ」「ヨリヨリ」「ココニ」の訓を与えられている。これらの訓は漢字の意味に対応しており、「時」字がどのように理解されていたかがわかる。「時に」は、中古の和文資料には見られず、『今昔物語集』に「時ニ」が使用されているが、時間副詞としては、頻度を表すものは見られず、時点を表すもののみである。また接続関係を表す「時に」が認められる。中世の和漢混淆文においても、同様の意味と用法が見られたが、時間副詞は時点を表すものが主であった。以上のことから、古代中国語の時間副詞「時」の意味・用法が、漢字そのものや漢文訓読という行為を媒介にして、古代日本語の「時（とき）に」にやきつけられたことが明らかになった。

⁴ 『土井本太平記本文及び語彙索引』（1997年西端幸雄・志浦由紀恵共編勉誠社）

- I 副詞 (a) 動作事態が低程度で行われたり、起こったりする頻度を表す。
 (b) 動作事態が高程度で行われたり、起こったりする頻度を表す。
 (c) 動作事態が適時に行われたり、起こったりする時点を表す。
 (d) 動作事態が過去に行われたり、起こったりする時点を表す。
- II 代詞 (e) 指示代詞として、事物・場所を表す。
 (f) 「于時」で、動作事態が行われたり、起こったりする時間を表す。
 (g) 「于時」で、動作事態が行われたり、起こったりする場所を表す。
- III 連詞 (h) 「于時」で、接続関係を表す。

参考文献

- 山田孝雄1940『国語の中に於ける漢語の研究』寶文館
 井上寿老1956『漢文訓読の研究』著者出版
 中国語学研究会編1957『中国語研究史』江南書店
 王力1962『古代漢語』中華書局
 小島憲之1962『上代文学と中国文学上 中 下一出典論を中心とする比較文学的考察一』塙書店
 築島裕1963『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
 川端善明1964a「時の副詞（上）―述語の層についてその一―」『国語国文』33-11
 川端善明1964b「時の副詞（下）―述語の層についてその二―」『国語国文』33-12
 太田辰夫1964『古典中国語文法』汲古書院
 谷光忠彦1965「今昔物語集の文体―「其ノ時」「其ノ時ニ」「時ニ」の用法をめぐって―」
 『日本女子経済短期大学研究論集』11
 築島裕1966『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の国語学的研究』東京大学出版会
 鈴木直治1975『中国語と漢文―訓読の原則と漢語の特徴―』光生館
 輿水優1985『中国語の語法の話-中国語文法概論』光生館
 工藤浩1985「日本語の文の時間表現」『言語生活』403
 張麟声1986「中日両語の文法単位」『論集日本語研究（一）現代編』明治書院
 王笑湘1987『文言語法』中国人民大学出版社
 松下貞三1987『漢語受容史の研究』和泉書院
 太田辰夫1988『中国語史通考』白帝社
 楊伯峻1991『古漢語虚詞』中華書局
 中国社会科学語言研究所編1999『古代漢語虚詞詞典』商務印書館
 矢澤真人2000「副詞的修飾の諸相」『文の骨格』（日本語の文法1）岩波書店
 仁田義雄2002『副詞的表現の諸相』（新日本語文法選書3）くろしお出版
 藤井俊博2004「今昔物語集の接続語―「而ル間」「其ノ時ニ」を中心に―」
 『国語語彙史の研究』23和泉書院